

村上市上野遺跡第8次調査の出土土器について

— 自然流路 SR103 の出土土器を中心に —

加 藤 学 ・ 加 藤 元 康

はじめに

新潟県村上市猿沢・檜原に所在する上野遺跡は、縄文時代後期前葉の大規模集落である。三面川の支流である高根川右岸に立地し、標高は約 35 ～ 39 m で、花崗岩を主体とする西側の山地からの土砂流等によって形成された扇状地にある。SR103 は、遺構密度が高い範囲を南北方向に流れる自然流路である。本研修報告では、SR103 のうち、廃棄による埋め戻しで一括性があり、砂層を介在しながら重層的な堆積状況を把握することができた 27 G ～ 30 I グリッドの土器を対象とした。

自然流路 SR103

27 G ～ 30 I グリッドの自然流路 SR103 では、遺構上面で平地建物の柱穴や石囲炉を検出し、柱穴の底には柱荷重により湾曲して割れた土器片も出土した。このことから、流路は集落造営中に埋まり切ったと考えられた。また、自然流路のセクション（第 1 図）では、廃棄によって埋め戻された堆積物間に挟在する砂層を検出し、土砂流等の増水時に一時的に流れ込んできたものと考えられた。この砂層を指標に遺物の廃棄単位を 1 層から 7 層まで設定し、層別の遺物の取上げを行った。現地では、2 層に南三十稲場式土器、3 層以下で三十稲場式土器新段階が出土する傾向が見受けられた（第 2 図）。

研修計画と調査

本流路では土器型式による年代的な基準を設定できること、他地域の土器型式に関する情報が得られることが想定されたため、隣県を含めた後期前葉の土器について 2 か年の調査を計画した。1 年目は、三十稲場式土器段階を中心に、福島県・山形県で調査を実施した。実施日は令和 6 年 12 月 17 日～ 19 日である。

調査した遺跡は山形県花沢 A 遺跡、福島県越田和遺跡・獅子内遺跡・高木遺跡である。花沢 A 遺跡では土坑（DY 3）から出土した一括遺物、福島県越田和遺跡・獅子内遺跡・高木遺跡では綱取 I ・ II 式土器を中心に三十稲場式土器についても調査した。この他、大木 10 式や三十稲場式土器を中心に村上市アチヤ平遺跡の資料も観察した。

小結

現段階における所見を記載する。最下層で出土した土器（第 2 図 15）は綱取 I 式土器である。口縁無文帯直下の隆線の上に沈線を施しており、「最も新しい段階（綱取 I b 式新）になると口縁直下を巡る隆線のすぐ下に沿って沈線が施されるようになり、隆線も低くなる」（志賀 1990）という指摘から綱取 I 式でも新しい段階に位置づけられる。同一の層から三十稲場式土器新段階の土器（第 2 図 14）が出土しており、両者は共存すると考えられる。また 3 層から出土した波頂部に弧状の沈線を連続して施した鉢形土器の破片（第 2 図 5）は注口付鉢形土器で、三十稲場式土器新段階の土器である。この土器と類似する土器は米沢市花沢 A 遺跡の土坑（DY 3）から出土しており、口縁部の頸部直下に注口が付くいわゆる「千鳥窪類型」（鈴木 1992）に類する土器と併件している。堀之内 1 式並行と考えられ、本遺跡の三十稲場式土器新段階は綱取 I 式新段階と堀之内 1 式に並行すると想定できる。

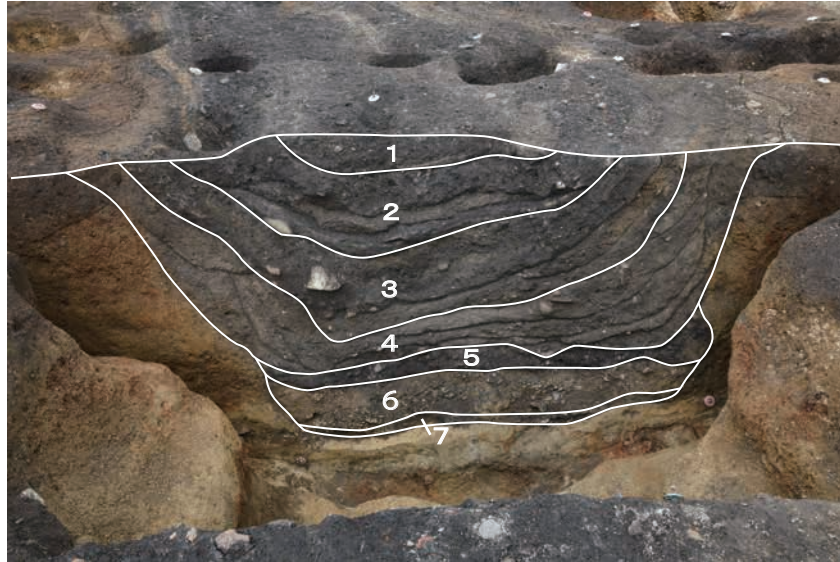
本遺跡の自然流路 SR103 の出土土器については接合作業が未実施のため、今後、整理作業を進めなが

ら検討する予定である。

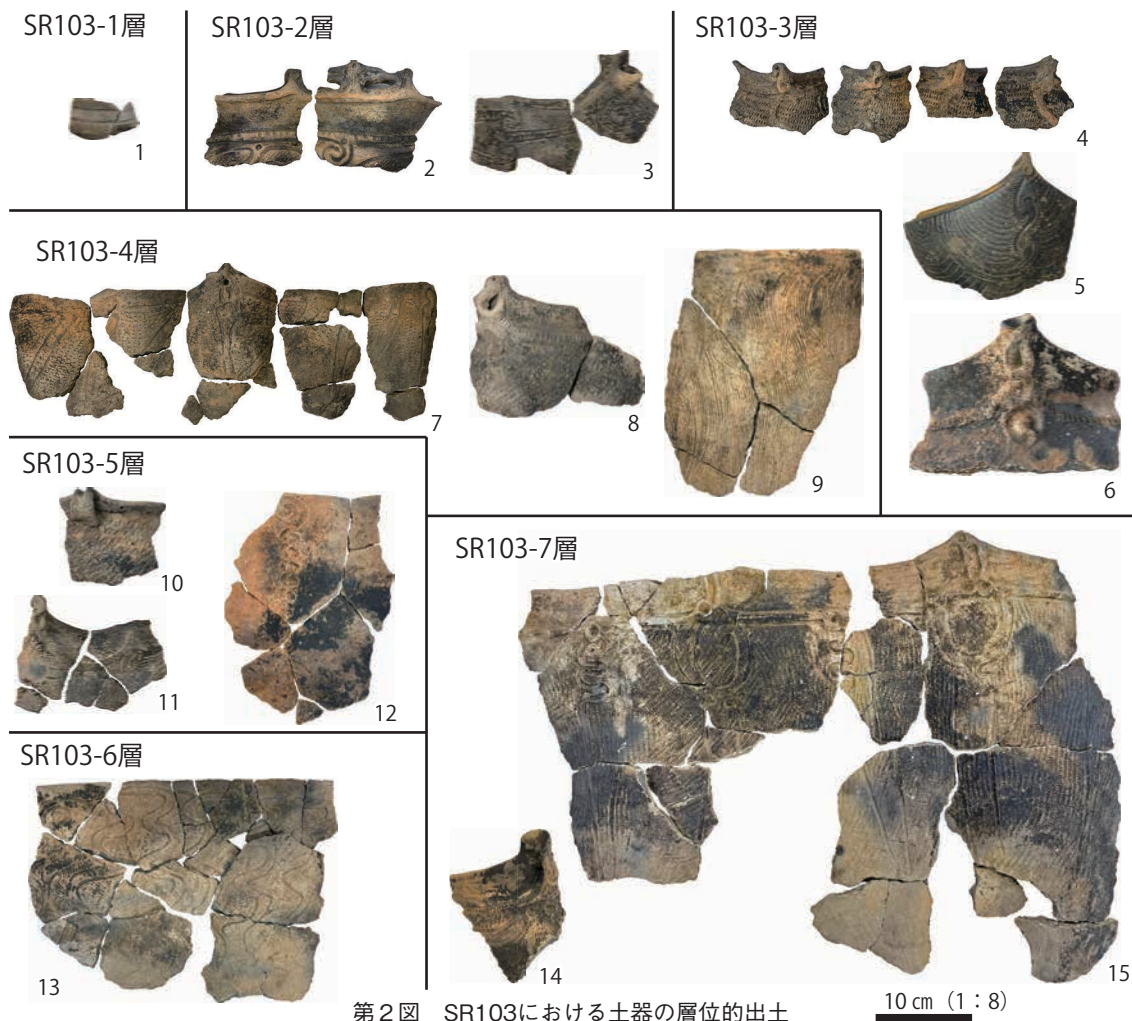
引用・参考文献

志賀敏行 1990「縄取Ⅰ式土器論序説」『史峰』第15号、新進考古学同人会、pp.26-35

鈴木徳雄 1992「縄文後期注口土器の成立」『縄文時代』第3号、縄文時代文化研究会、pp.63-94



第1図 SR103のセクション (27Hグリッド)



第2図 SR103における土器の層位的出土